

2020年10月23日

第2回
厚生労働省指定 臨床実習指導者講習会
(長崎県講習会)
報告書

2020年10月17日～18日
長崎リハビリテーション学院
(長崎県大村市)

一般社団法人 日本作業療法士協会

1. 講習会の名称：「厚生労働省指定臨床実習指導者講習会（都道府県講習会）」
2. 主催：一般社団法人全国リハビリテーション学校協会
一般社団法人日本作業療法士協会
公益社団法人日本理学療法士協会
3. 運営担当：一般社団法人長崎県作業療法士協会
4. 開催日：2020年10月17日（土）～ 10月18日（日）
5. 会場：長崎県大村市 長崎リハビリテーション学院
6. 主催責任者：
 - 高木邦格（一般社団法人全国リハビリテーション学校協会 理事長）
 - 中村春基（一般社団法人日本作業療法士協会 会長）
 - 半田一登（公益社団法人日本理学療法士協会 会長）
7. 運営責任者：沖 英一（一般社団法人長崎県作業療法士協会 会長）
8. 講習会世話人名簿（別添1）
9. 講習会参加・修了者名簿（別添2）
10. 講習会の目標（学修目標）

目的：作業療法臨床実習において、効果的な臨床実習を円滑に行うために必要な知識を習得し、指導方法を身につける

講義・演習テーマ	学修目標
講義1 理学療法士、作業療法士養成施設における臨床実習制度論 意義・目的・内容・仕組み	作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する
演習1 一般目標と行動目標	
講義2-1 臨床実習指導方法論① 学生の特徴と対応 対象者の捉えかた 臨床実習指導のあり方	作業療法臨床実習における実習指導者の役割、学生の現代気質と実習中の心の機微およびその対応方法について理解する。
講義2-2 臨床実習指導方法論② 見学・模倣・実施プロセスと 指導ポイント コーチング・ティーチング	作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学—模倣—実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した指導方法について理解する。
演習2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践	
講義3 臨床実習における管理・運営 臨床実習の基本構造、 ハラスメント、リスク管理、個人情報保護	作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。
演習3 ハラスメント防止	
講義4 臨床実習における学生評価 教育評価の意義 学生評価とは 評価の側面と役割（OSCEの活用）	作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特にOSCE活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。
演習4 臨床実習における学生評価 重点ポイントの整理、実習遂行が困難な学生への対処法	
講義5 職業倫理および連携論 多職種連携・チームワーク論・卒後教育との関連	作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。
演習5 多職種連携	
講義6 臨床実習指導方法論③ 生活行為向上マネジメント（MTDLP）	MTDLPを活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習におけるMTDLPの活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。
演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践	
演習6-2 事例報告書の作成 事例報告書の作成指導・報告の仕方 臨床思考過程の理解と指導	臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。
演習7 作業療法参加型臨床実習の理解 作業療法参加型実習のあり方 臨床実習プログラムの立案	見学—模倣—実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

11. 講習会のプログラム表

<1日目>

時間	講義内容	主担当
9:20~9:30	開会 オリエンテーション (講習会の進め方)	井戸
9:30~10:00 (30分)	講義1 理学療法士、作業療法士養成施設における臨床実習制度論 意義・目的・内容・仕組み	荒木
10:00~11:00 (60分)	演習1 一般目標と行動目標	荒木
11:00~11:05 (5分)	休憩	
11:05~12:05 (60分)	講義2-1 臨床実習指導方法論① 学生の特徴と対応 対象者の捉えかた 臨床実習指導のあり方	福島
12:05~13:05 (60分)	講義2-2 臨床実習指導方法論② 見学・模倣・実施プロセスと指導ポイント コーチング・ティーチング	中村
13:05~13:10	休憩	
13:10~14:40 (90分)	演習2 基本的態度・臨床技能・臨床の思考過程の見学・模倣・実施の実 践	牧野
14:40~14:45	休憩	
14:45~15:15 (30分)	講義3 臨床実習における管理・運営 臨床実習の基本構造、ハラスメント、リスク管理、個人情報保護	桑原
15:15~16:15 (60分)	演習3 ハラスメント防止	桑原
16:15~16:20	休憩	
16:20~17:20 (60分)	講義4 臨床実習における学生評価 教育評価の意義 学生評価とは 評価の側面と役割 (OSCEの活用)	東
17:20~18:50 (90分)	演習4 臨床実習における学生評価の実際 重点ポイントの整理および実習遂行が困難な学生への対処法	東

<2日目>

8:45~9:15 (30分)	講義5 職業倫理および連携論 多職種連携・チームワーク論、卒後教育との関連	末武
9:15~10:15 (60分)	演習5 多職種連携	末武
10:15~10:20	休憩	
10:20~11:20 (60分)	講義6 臨床実習指導方法論③ 生活行為向上マネジメント (MTDLP)	村木
11:20~12:50 (90分)	演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践	村木
12:50~12:55	休憩	
12:55~14:25 (90分)	演習6-2 事例報告書の作成 事例報告書の作成指導・報告の仕方 臨床思考過程の理解と指導	丹羽
14:25~14:30	休憩	
14:30~16:00 (90分)	演習7 作業療法参加型臨床実習の理解 作業療法参加型実習のあり方 臨床実習プログラムの立案	丹羽
16:00~16:05 (5分)	閉会・事務連絡	

*尚、演習は世話人全員がファシリテーターとなり実施致しました。

演習2と演習6-1は昼食を取りながら実施致しました。

12. 演習内容

(学修目標、発表の要点、グループワークで議論された内容、感想)

グループ数：6グループ

会場風景

Web開催のため添付写真はありません。

- ① 演習 1 一般目標と行動目標
- ② 演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床の思考過程の見学・模倣・実施の実践
- ③ 演習 3 ハラスメント防止
- ④ 演習 4 臨床実習における学生評価の実際
- ⑤ 演習 5 多職種連携
- ⑥ 演習 6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践
- ⑦ 演習 6-2 事例報告書の作成
- ⑧ 演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

演習 1

一般目標と行動目標

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 1 世話人氏名： 桑原由喜

GW 司会者：中村次郎 記録者： 松尾萌美 発表者：二瀬祐介

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. コミュニケーション
2. 自身への気付き
3. 作業療法への興味

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・コミュニケーションをとる。
- ・作業療法に興味を持ってもらう。
- ・患者の生活歴、生活背景などの基本情報(カルテから収集できない情報)の収集を通じて、患者さんとのコミュニケーションをとってもらう。
- ・距離の取り方を知る。(スタッフ・患者さんに対して)
- ・指導者側も学生側のキャラクター等を理解するよう努める。
- ・学生自身が自分の強みを見つけられるようにする。
- ・実習を終えるとすぐに臨床に出るので、その時に困らないように臨床に出てから自分が出来ることを意識してもらう。
- ・他者を見て模倣し学んでほしい。
- ・患者を担当した際に、コミュニケーションを十分にとらないまま評価などに入りがちだが、まず人を相手にしているということを意識してもらいたい。

感想

実習指導者側として、医学知識を学んで欲しいという思いよりも、社会人としてのコミュニケーションの取り方や、患者との関わり方について学んで欲しいと考えているセラピストが多かった。知識や技術はその後に身に付けていって欲しいと考えているセラピストが多いと感じた。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 2 世話人氏名：牧野 航

GW 司会者：中島彩乃 記録者：竹原大朝 発表者：馬渡立臣

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 生活歴（個人因子）
2. 多職種連携
3. 社会人としてのマナー

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・実際に患者様に対して信頼関係を築き、ニーズを評価する。
- ・今までの生活や経歴などの個人因子の話聞く。信頼関係をつくる。
- ・患者様との関わり、臨床でしか経験できないことを経験する。
- ・患者様の価値観、幅広い年代の方に対する関わり。
- ・精神科では患者さん本人をみるのではなく疾患（統合失調症など）をみてしまうことが多いため、その人をみてもらえるようになって欲しい。
- ・多職種との連携、チーム医療をしっかりと経験してほしい。
- ・あいさつ、身だしなみ、言葉使いなど社会人としてのマナーを持ってほしい。

感想

生活歴や価値観についてなど話をしっかり聞くこと、多職種との連携をとる、社会人としてのマナーなど、人との関わりを学んでほしい。知識より社会性が大切と感じた。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 3班 世話人氏名： 東 登志夫

GW 司会者： 小田和徳 記録者： 澤瀬 穂 発表者：木崎 康

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 患者様とのかかわり方
2. 作業療法の楽しさ、やりがい
3. 学んだことの実践

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・利用者様とのかかわりを通じて、作業療法の目的を考えて欲しい。
- ・学生さん自身が自分の分からない事について気づき考えることができる。
- ・患者さんの生活・価値観に興味関心を持ち知ること、人生に触れること
- ・患者さんとの接し方
- ・発達障害の子どもたちに実際に触れあってみること
- ・周囲と協働して働く上での心配り
- ・学校で学んだことを実際の臨床の場面で触れて感じてほしい。
- ・本人や家族の想いを尊重しながら退院するためにはどうしたらいいか、退院後の生活について考える。
- ・医療の中での作業療法士の立ち位置、色々な職種の理解を深める。
- ・精神科作業療法の楽しさ、やりがい、疾患への理解を深めてほしい。

感想

作業療法の楽しさ・やりがいを伝えながら実際の臨床場面において作業療法士の立ち位置や多職種との連携の重要性を伝えることが大切であるのではないかと思う。また、患者様とのかかわりの中で担当患者様の人生の一部にかかわることを理解したうえで学んだことを実践していくことができるように指導者としても伝えていかなければいけないと再確認をすることが出来た。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 4 世話人氏名： 田中 剛

GW 司会者：福井 志織 記録者： 下村 太郎 発表者： 井手 瑛俊

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 環境づくり
2. やり取り
3. 接遇や挨拶

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・質問しやすい環境づくり
- ・目的を明確にする
- ・病院に慣れてもらう
- ・接遇、挨拶といった接し方、そのうえで、知識や技術の習得をしてほしい
- ・コミュニケーションの仕方を患者さんごとに工夫する
- ・他部門との関わり方を学ぶ
- ・患者さんとのコミュニケーションの仕方を学んだうえで、触れることを恐れず検査等の実技体験を通して技術を学んでほしい
- ・問題点について考察する力をつけてほしい
- ・レポートにおいては指導者と学生間のやり取りを重視したい
- ・学生ごとに目標を定めて実習指導に臨む

感想

実習に対する目的を明確にする為にも、質問しやすい雰囲気づくりを行うことが大切である。コミュニケーションの仕方も指導者と学生間のみならず、患者さんに対してや多職種とのかかわり方と多岐にわたるため、場面に応じて工夫していくことが必要。その上で、患者さんの問題点をよく考え、関係性を築き、実際に触れる時にも不安を持つのではなく、一生懸命に取り組む姿勢を持つことが大切。

指導する側としては実習を通して学生ごとの目標設定の仕方などそれぞれの状態に応じて関わり方を工夫して相互のやり取りを柔軟に行っていくことが求められる。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 5 世話人氏名： 鎌田秀一

GW 司会者： 亀山真奈美 記録者： 田中邑佳 発表者： 山口良太

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. コミュニケーション能力
2. 作業療法・作業療法士の役割
3. 社会性

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・患者様とのコミュニケーション能力
- ・傾聴する姿勢
- ・学校で習うことと臨床のギャップがあるため、それを埋めてほしい
さらに現場の作業療法士の役割を知ってほしい
- ・相手の立場になって考えることを学んでほしい
- ・挨拶など社会人としてのマナーを学んでほしい
- ・患者様の気持ちをくみ取る力を身に付けてほしい

感想

コミュニケーション能力やマナーなど社会人としての必要なスキルが不足していると感じました。作業療法士の役割や患者様とのコミュニケーション能力だけでなく、社会人としてのマナーを教育していく事も大事だと改めて感じました。他の作業療法士が実習時に大切にしている事を伺う機会は初めてでした。話を伺うととても共感できる点も多く、様々な視点でのポイントを再確認することができました。その点が、社会人・作業療法士として求められる部分であると認識し、今後実習指導の際には心がけていきたいと思います。作業療法士の魅力を伝えることは指導者にとって大事な役割だと思いました。演習を通して、必要なことの再確認と新しく大切なポイントも知ることができました。今後の指導に役立てさせて頂きたいと思います。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 6 世話人氏名：丹羽 敦

GW 司会者：徳永 幸恵 記録者：原口 卓也 発表者：飯野 理恵

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 接遇
2. チーム医療を行う上での連携
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・服装、挨拶、礼儀などの基本的なマナーを学んでほしい。
- ・教科書に載っていない疾患の多様性を学んでほしい。
- ・いろいろな人（スタッフ等）との関わりを学んでほしい。
- ・チーム医療などの連携を学んでほしい。
- ・机上の状態だけではなく、臨床でのかかわりを学んでほしい。
- ・机上で学んだ評価の内容は分かっているけど、力加減など臨床においてしか体験できないようなことを学んでほしい。
- ・知識と評価項目を結び付けられるような実習を行ってほしい。

感想

社会人としてのマナーや、他のスタッフとの連携、臨床でしか学べない患者への対応などを学んでほしいといった意見が多かった。

演習 2

基本的態度・臨床技能・臨床思考
過程の見学・模倣・実施の実践

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 1 世話人氏名：桑原由喜

GW 司会者：松尾萌美

記録者：二瀬祐介

発表者：大平健二

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 実戦に近い学習（メリット）
2. 患者さんに対する配慮（課題）
3. 限られた時間（課題）

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞
メリット

- ・見学する前に 目的・方法・リスクなどを説明することで、見学でみるべきポイントが分かりやすくなる。
- ・一つひとつ治療の手技など一緒に確認できる。
- ・ADL 動作などは教科書で触れられている以上の範囲で、学生に伝えることができる。
- ・いい意味で失敗しても責任が伴いにくく、実戦に近い医療を臨床という環境で体験できる。
- ・学生への説明のしづらさから、作業療法士自身の知識の曖昧さを確認できる。

課題

- ・丁寧に説明するためには、時間がしっかり取りづらい。学生に気を遣いすぎるあまり、患者さんにかかる時間が少なくなり、治療時間がオーバーしてしまう。
- ・患者さん側からすると時間がかかっている印象をうけるのではないか。（学生さんの自主学习は必要）
- ・間違えたことは教えられないため、指導者側の絶対的な知識と技術がいる。（指導者によって実習の質に差が生じやすい）

感想

- ・患者さんの評価も実習生の指導も同時に行っていく、指導者の技術も求められるように感じた。
- ・学生の自主性もみていく必要があると思った。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 2 世話人氏名：荒木一博

GW 司会者：馬渡立臣 記録者：中島彩乃 発表者：古賀善彦

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 指導者のメリット・デメリット
2. 学生のメリット・デメリット
3. 患者さんのメリット・デメリット

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

指導者のメリット

- ・指導するにあたり再度勉強して確認することができるのでいいと思う
- ・細かな指導ができる
- ・患者さんに対して説明する時間を確保できる
- 患者さんにもわかりやすい
- ・指導したい場所にポイントをしばって指導することができる

学生のメリット

- ・わかりやすい、注意点など細かく指導してもらえて理解が深まる
- ・バイザーとのコミュニケーションが取りやすい
- 学生自身が不安に思っていることやわかっていないことも話しやすい

患者さんへのメリット

- ・学生への説明を通し患者さん自身が理解しやすい、整理しやすい

課題

指導者のデメリット

- ・患者さんが話しにくいこともでてくる（信頼関係が築けない場合など・・・）
- ・時間がかかってしまう

学生のデメリット

- ・バイザーとのコミュニケーションが密になりすぎる
- コミュニケーションが取りにくい場合は負担に感じる、実習が進まない可能性もある
- ・学生自身の考える機会が減る。
- ・患者さんと学生さんとの信頼関係構築にバイザーがいると悪影響がある可能性もある

患者さんへのデメリット

- ・説明に時間がかかってしまう
- ・他にしなければいけない訓練がおろそかになってしまう
- ・患者さんにより対応を変える必要がある（後で指導時間を設けるなど）

感想

- ・患者さんにより対応を変える必要がある
- ・施設により時間を設けられない場合などもあるため検討することが必要だと感じた
- ・見学、模倣、実施を通し学生さんの理解度は深まると感じた
- ・学生さん自身が考える過程が少なくなる可能性もあるように感じた（考える機会を持たせる工夫も指導者側に必要）

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 3班 世話人氏名 田中 剛

GW 司会：澤瀬 穂 記録者：木崎 康 発表者：谷口 友仁

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 言語化できる
2. フィードバックのし易さ
3. 業務中の時間のとりにくさ

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・ 普段自分が行っている事を言語化して振り返る機会となる。
- ・ 学生に説明していく中で現在の業務の改善点に気付く事が出来る。
- ・ 学生に参加してもらおう事でCEの実務の負担を減らすことが出来る。（その分、学生への指導の労力にあてる）
- ・ 言語化し共有することで次の学生や新人、部署移動時に普遍的なマニュアルができる。
- ・ CEと学生が十分な力を発揮する事で従来より良い治療が展開できる可能性あり。
- ・ 学生の実習に対する不安感が軽減できる。
- ・ 客観的に普段自分の説明していることを見ることが出来る。
- ・ 双方向でのやり取りを行うことで実習生と指導者、お互いの理解や信頼関係を構築しやすく実習生が安心して主体的に参加できる。
- ・ 見学・模倣・実施という段階に分けて指導をすることで学生の理解度を把握しポイントを絞ってフィードバックが行いやすい。技術的な成長の促しによって自信につながる。
- ・ 学生が自分の考えを **OUTPUT** できる機会が増え学生自身が主体的に行動を選択できる。
- ・ 実際に行っている作業療法を見学しながら確認ができる。・指導者の監視のもとで行うことが出来るためうまく出来ていない部分などをその場で指導してもらうことが出来る。

課題

- ・ 学生の能力やCEの指導力によっては従来の治療よりレベルが下がる事がある。
- ・ 学生の評価、次のレベルへの到達見通しに関してはCEの能力に一定の基準が必要。
- ・ 実際に限られた業務・実習時間で一つ一つ行っていく難しさがある。
- ・ 自分の考えを上手くいえると成り立つが難しい部分もありそう。
- ・ リハビリ時間の合間が作りにくい。
- ・ 患者様の体調や疲労感等を小まめに確認することが必要。

感想

作業療法参加型実習は今回初めて学習しました。その都度のフィードバックを行うことでより復習しやすいと思います。
業務中の時間の取り方には工夫が必要と思いました。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 4 世話人氏名：中村 和也

GW 司会者：下村 太郎 記録者：井手 瑛俊 発表者：神崎 麻理恵

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点 (キーワード)

メリット	課題
1. 段階的な理解	時間的負担
2. 行うことの明確さ	指導者の力量
3. 時間や指導の力量	主体性の低下

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>
メリット

学生主体から一連の動きを学習することができる
手順で悩むことが少なくなる
学生の状態を理解することができ、介入しやすい
段階によって指導しやすくなる
経験を増やしやすいく
できることが明確になる
話が苦手な学生にとって介入しやすい

課題

バイザーの負担が増える
伝え方や内容の伝達方法に工夫が必要になる
実際に学生に指導する時間を多くとることができるか
学生が一人で考える時間が少なくなる、学習する時間も減る
臨床の中で実際にメモを取ったり、その場での指導ができるか

感想

段階的に学生がどの程度理解しているかを把握しやすく、指導も行いやすい。また、指導方法も明確にすることができる。しかし、時間の確保や指導者の力量も問われる。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 5 世話人氏名： 鎌田 秀一

GW 司会者： 田中 邑佳 記録者： 山本 珠美 発表者： 山口 良太

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の理解度の把握
2. 評価・治療のイメージ
3. 段階的な指導

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・学生は、指導者の行っている治療目的や考え方を理解しやすい
- ・解釈しやすい
- ・指導者も形式があることで段階を追って教えることができる
- ・応用力を学べる
- ・学生の達成度や理解度を細かく知ることができる
- ・見学・模倣があることで学生は介入しやすくなる

課題

- ・患者様の変化に柔軟に対応しながら指導する力が求められる。
- ・学生に伝えるために指導者自身が思考を整理しておく必要がある。
- ・模倣から実施の段階に移行する学生の技量の判断やタイミングが求められる。
- ・学生と指導者で理解度を細かく確認する必要がある。

感想

- ・実際に、参加型実習をどのように進めると良いのか悩んでいたので実際の動画で確認することができ良い機会になりました。また、今回挙げた課題を今後検討するとともにスキルアップできれば良いと思いました。
- ・参加型実習の進め方、指導の仕方のイメージがわかりました。
- ・学生の能力の見極めが難しいと感じました。模倣前期で繰り返し確認する作業が大切だと感じました。
- ・実際の実習場面の動画を確認させて頂き、参加型実習での教育方法がイメージできました。SV・OTS ともにしっかりと考えを言語化し、認識を共有する事が大事だなと感じました。
- ・学生の技量を細かく確認しながら段階をふんでいく必要があると思いました。参加型実習の指導の仕方が具体的に学べてよかったです。
- ・参加型実習は大切ですが、注意すべき点も多いため、指導する側は学生と患者の両者に不利益が生じないよう、常に配慮しながら関わる事が重要だと感じました。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 6 世話人氏名：丹羽 敦

GW 司会者：原口 卓也 記録者：飯野 理恵 発表者：岩永 桜子

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の実施内容が明確になる
2. 指導に時間やスキルを要す
- 3.

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>
メリット

- ・学生に直接介入するための手掛かりになる
- ・見学することにより対象者とどう関わっていけばよいか分かりやすくなる
- ・実際に手本を見せることで学生の緊張がとけ余裕もでき、自信を持って行える
- ・流れが明確になるためイメージをもってスムーズに実施できる
- ・指導者自身がやり方を振り返ることができ誤りを防ぐことができる
- ・学生の習熟度を把握しやすい

課題

- ・指導時間を要す（学生・指導者・対象者が相互に関わる時間を要す）
- ・対象者のリハビリ実施時間が限られているため細かく時間をかけることは困難
- ・検査（評価）・治療の目的等が伝わりにくい対象者がいる
- ・繰り返すことにより患者への負担が増すのではないかと

感想

- ・メモをとることが患者にはよくないこともあるが、メモをとれないと学生も困るので患者に理解してもらうことが必要になる。
- ・指導者側の知識・スキルに影響されると思った。
- ・患者を前にしてどこまで踏み込んで口頭で伝えてよいのか、終了後にフィードバックを行ったほうが良いこともあるのではないかと考えた。
- ・見学・模倣・実施と段階付けの流れが明確になって指導しやすいと思った。
- ・精神科領域の場合、明確なマニュアルがないためどう伝えてよいか分からないことがある
- ・指導者としてスキルアップしていかななくてはいけない

演習 3

ハラスメント防止

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 1 世話人氏名：荒木 一博

GW 司会者：大平健二 記録者：延 祐樹 発表者：増田 恵

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 他者への相談
2. 環境設定（1対1になりすぎない）
3. 指導内容の再確認

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・ 経験年数が少なく講習も受けていない指導者が指導にあたっていたら、適切な講習を受けた監督者がその指導者に対して直接介入する
- ・ 実習指導に当たる際、これはハラスメントかと迷ったら1人で判断せず周囲に尋ねる
- ・ 学生が「これはハラスメントかな」と思ったら、指導者ではない別のスタッフに相談できる環境を整える
- ・ 1対1で他者の介入がない環境での指導ではなく、他のスタッフがいる場での指導を行う
- ・ 実習生が来る前に、実習指導の要点を再確認しておく

感想

一概に学生のスキル不足ばかりに目を向けるのではなく、指導者側も自身の振る舞いを再確認する機会となる。ハラスメントは学生の取り方次第ということもあるため、他者へも状況を相談することも必要だと考えた。つまり、指導者側の環境設定などもしておく必要性を感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 2 世話人氏名： 牧野 航

GW 司会者： 古賀 善彦 記録者： 馬渡 立臣 発表者： 森 陵輔

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 相手の受けとめ方を考える
2. 業務外のことはしない
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ①実習の打ち上げや学生との食事会について
→業務外での催しを開催しない
→昼の弁当を一緒に食べる
→施設内での対応にとどめる
- ②職員が行っていない業務（掃除など）を学生が行う事について
→職員が行うようにする
→学生だけにはさせない
→業務時間内に職員も一緒に行く
- ③症例報告会のあり方について
→少人数での（SV・担当V・担当PTなど）症例報告会にする
→実施の有無や方法について養成校と相談する
- ④業務時間後の勉強会などの参加について
→遅くならないように帰宅させる
→勤務後の勉強会などには参加させず業務内での実習にとどめる

感想

相手の受けとめ方を考え、1対1にならないような環境をつくるなど配慮をすることの大切さを感じた。統一した考えを持つためにも勉強会の開催や養成校との連携も大切な事であることを学んだ。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 3 世話人氏名：田中 剛

GW 司会者：木崎 康 記録者：谷口 友仁 発表者：中村 有希

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 相手に対して不快な言動をしないということ。
2. 学生の指導は自分の経験を振り返りながら。
3. 職場全体でハラスメントに関する意識を共有する。

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・基本的に自分がされて嫌な言動、不快に思うことは学生に対しても同じだと思って接する事。
- ・実習開始時に不快な気分になった場合は伝えるよう声掛けする（相談できる環境作り）
- ・指導者の一言が学生に与える影響が大きいことを念頭に置き発言に留意する。
- ・学生から発言しにくいこと（距離感）は周囲のスタッフで配慮し、問題等がある場合は当人に注意する。
- ・学生の間違いに対して、対応方法を学生本人と一緒に話し合う機会を持つ。
- ・学生が触れて欲しくない部分もあるため、指導者側から強要しないよう留意する。
- ・自分が経験したことから同じようなことを繰り返してはいけないということ。
- ・学生が複数いる場合は学生同士相談できる環境をつくる。
- ・CEのみでなく職場全体でハラスメントに対する意識の共有を図る。
- ・学生の居場所を確保し、発言しやすい環境を作る
- ・話しにくい部分に関しては日誌等に記載する形をとる。
- ・自身の失敗談を話すことで学生側の緊張を取り除く。

感想

言動一つ一つがハラスメントにつながる可能性があるのだと改めて痛感しました。対応策は職場全体(部署)で共有することが、個人の理解へ繋がるものではないかと思います。そして、学生は良くも悪くも「影響」を受けやすい立場なのだと考える時間になりました。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 4 世話人氏名：中村 和也

GW 司会者：井手 瑛俊 記録者：神崎 麻理恵 発表者：関戸 馨

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 学生が自由選択出来る環境作り
2. 客観的な第三者からの目線
3. 指導内容の確認

グループワークで議論された内容

- ・ 学生に対して語尾が強くなってしまいう事や指導する内容で言葉が強くなる事がある。
→他スタッフと対応を同じようにする。「わかってなくて当然」というスタンスで指導する。場面によって、ティーチング・コーチングの対応を行っていく。
- ・ 飲み会が多い職場では学生として「行かなくてはいけない」と義務的に行っていた。
→選択は自由であるが、行くかどうかは学生の自由意思である。飲み会が悪いものではなく、良い情報収集・コミュニケーションの場となることもある。
飲み会自体を行わない事もハラスメント防止策となるか。食事会で代行する。
「行くでしょ？」といったパワハラ的なものでなく、学生が選べるように話す。
実習途中、決起する意味で飲み会を開くこともあるが、翌日が休みや課題は出さないと
いう考慮があってもよいのではないか。
- ・ 女性の学生に対して、異性のセラピストが実際に学生の体を動かして「こういうふうに動かす」と指導する。
→客観的に他スタッフに確認する。女性のスタッフに指導をお願いする。他のスタッフも一緒に介入して入る。異性と二人というのが苦手な学生については、事前に相談をする。

感想

相手の立場を考えながらの言葉遣い、ハラスメントに関する環境作り・勉強会の開催等が必要である。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 5班 世話人氏名： 鎌田 秀一

GW司会者： 山本 珠美 記録者：田嶋 ますみ 発表者：山口 良太

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 上司への相談
2. 実習への意識統一（ハラスメントについて）
3. 相談しやすい環境設定（学生への声掛け・同性訓練士）

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・飲み会の席でのハラスメントに対しては、他の先生に相談をするなど、そのスタッフと隣の席にならないよう配慮をする
- ・他スタッフともハラスメントに対する話をする機会を設ける
- ・学生に声をかけてあげる
- ・新人等の学生と年の近いスタッフが声をかける等、学生の居心地をよくする。
- ・リハビリの長にも相談をする
- ・女性スタッフに相談できるような環境を作る
- ・部署内でハラスメントについて研修会を実施する

感想

- ・実習は作業療法を体感する為の最初の間だと思います。その場が作業療法学生にとってしんどいものにならないように、受け入れ施設のスタッフ一同で学びやすい環境設定をしていく事が大切だと感じました。
- ・自分でも気づかぬうちに、ハラスメントととられるような言動をしないよう常日頃から学生の立場に立って接することができるよう意識しようと思いました。
- ・学生が相談しやすい環境づくりが大切だと感じました。
- ・研修会などセラピストがハラスメントに対する知識を持つことが大切だと感じました。
- ・指導者だけでなく部署全体でハラスメントの意識を持ち、事前に防止できるような環境を作っていくことが大事だと感じました。
- ・発信者は何気ない行動・発言・態度であり気にしていないことでも、相手にとってはハラスメントに成り得ることがあるため、相手の立場に立って考えることを心がけようと改めて感じました。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 6 世話人氏名：丹羽 敦

GW 司会者：飯野 理恵 記録者：岩名 桜子 発表者：吉村 千聖

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 客観的な視点
2. 1対1にならない
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・学生の能力を知ったうえで課題内容や量を調整していく
- ・時間を逆算しながらスケジュール管理を一緒に行い、睡眠時間を確保する
- ・学生とバイザーの距離間を他のスタッフに客観的にみてもらい、別の視点から学生に指導を行ってもらおう
- ・日ごろからコミュニケーションを取りながら信頼関係を築いていく
- ・実習中は食事やお酒の場に学生を誘わない
- ・学生への指導の仕方が不安な為、上司などに相談を行い、助言をもらう
- ・部署内で連携を図る

感想

日頃から学生とコミュニケーションを取り、相手を知ることが大事だと思いました。また、他のスタッフも巻き込み、みんなで学生を指導していくことが必要だと感じました。

演習 4

臨床実習における学生評価

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 1 世話人氏名： 桑原 由喜

GW 司会者：延 祐樹 記録者：増田 恵 発表者：中村 次郎

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 主体的に実習に取り組んでいるか
2. 自己分析（自分のことを知っていてほしい長所・短所）
3. 学生に合わせた対応を心がける

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・理解度の確認：翌日実際に出来るかどうかで理解度を評価している。
- ・成長の具合：言われたことをしてくるか、次は自分で気付けるか、など
- ・一度にたくさん伝えず最終的には大事だと思ったことを 2~3 個に絞って伝える。
- ・それぞれのスタート地点からの知識がつながっているか。点と点をつなぎ線にできるか。
- ・主体性：自分の意見を発信する。
- ・褒められたらうれしいので正のフィードバックを多めにする。
- ・プレッシャーを与えない。出来なくて当たり前という気持ちで伝える。
- ・患者さんを評価する時と同じ視点で見ている。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・自分自身が患者に影響を与えることを知っておいてほしい。自己分析をしてきてほしい。
- ・プライドを捨ててわからないことを聞けるといった学ぶ姿勢で臨んでほしい。
- ・体調管理：心身ともに整えて、実習に集中できる状態できてほしい。
- ・先輩などに事前に話を聞くなどにより実習生としての心構えをもってきてほしい。
- ・挨拶、ほうれんそう（報告・連絡・相談）の大切さを知っておいてほしい。
- ・社会性を身につけ、身だしなみを整えて臨んでほしい。
- ・実習先が決まった時点で主たる疾患についての基礎知識を備えておいてほしい。
- ・ROM、MMT、MMSE、HDS-R などの基本的な評価ができる状態で来て欲しい。

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・ホテルの使い方が悪い、事故を起こすなど素行の問題で実習中止措置となった。
- ・実習終了間際に患者からの贈り物を自己判断で対応していた。（後日、学校に確認）
- ・患者さんとコミュニケーションをとれない学生は見学レベルにとどめた。
- ・口頭での質問が出ない学生に、デイリーノートを紹介した文章質問を中心に行った。
- ・同じテンションで挨拶する学生。自分の対人交流の癖を知るとアドバイスを行った。

感想

どういった学生にも対応できるように、普段の業務から段階設定や、目標設定を細かく意識しておくことが大切であると感じた。

学生に対する評価にしても、対応にしても、個々の能力や状態に合わせて見ることが大切だと感じた。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 2 世話人氏名：牧野 航

GW 司会者：森 陵輔 記録者：中島 彩乃 発表者：竹原 大朝

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 情意領域に重きを置いている（社会性、情熱など）
2. 実習に対する思い、作業療法士に対する思いをしっかりとってきてほしい
3. なにか問題があった場合は学校と密に連絡を取り合う

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・社会性が身についているか？挨拶など・指導したことを適切に実施できるかどうか？
- 提出物の期限を守ることができるか、メモを取っているかなど
- 一度伝えたことを理解しようとする姿勢があるかどうか
- ・患者さんへの思いやりがあるかどうか
- 課題のための関わりになるのではなく患者さんへの思いが持てているのか
- 患者さんの気持ちに寄り添うことができているかどうか
- 退院後の生活や本人の希望に寄り添ってほしい

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・社会性を備えてきてほしい・将来どのような作業療法士になりたいのか（OT 像）
- ・どんな実習をしたいか事前に考えてきてほしい→その気持ちを共有して指導に臨みたい
- ・自分中心になりがちなので、患者さんの人生に携わる職業であるという自覚を持ってほしい
- ・疾患への理解を少しでもしてきてほしい
- ・血圧測定や基本的な移乗介助の方法など学内で学ぶ事ができることはしっかり学んできてほしい
- ・事前に必要な物は準備してきてほしい（評価用紙、パソコンの故障など・・・）

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・退院後の生活がイメージできない学生
- 退院時同行や退院時カンファレンスに参加してもらった
- ・遅刻をする学生→始業時間前に連絡するように（病棟にスタッフが行ってしまうため対応ができない）→携帯電話番号を交換することも検討（学校と相談し相互に納得した上で対応をする）
- ・うそをつく、居眠りをする（情意領域）→スーパーバイザーから指導をしてもらう
- 職員間の体制を見直す（役割を分けて関わりを行う）
- ・ケースレポートをコピー&ペーストしている学生→今後はしないように約束をした

感想

学生の特徴や人柄を見ながら対応する必要があると感じました。その学生自身の成長を見守る寛大な気持ちを持って対応することが大事だと学びました。学校教員や他の職員と協力し学生の成長を見守る姿勢を大事にしていきたいと思いました。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 3 世話人氏名： 東 登志夫

GW 司会者： 中村 有希 記録者： 円能寺 哲 発表者： 山田ひとみ

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点 (キーワード)

1. コミュニケーション能力
2. 実習に対しての基本的な姿勢と態度
3. SNS

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

自分ができないことや気になった部分を学ぼうとする姿勢

目標達成のために努力・行動ができるか

社会人としての基本的な態度、礼儀、身だしなみ

患者さんや周囲のスタッフとのコミュニケーション能力

患者さんに寄り添って、関心を向けて考察できるか

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと (態度面、知識面、技術面) >

態度面：基本的な挨拶などの接遇、学ぶ意欲、コミュニケーションを取ろうとする意欲

知識面：疾患についての基本的知識、各種評価に関する知識、リスクに関する知識

技術面：領域・疾患ごと姿勢の評価技術、コミュニケーションスキル、リスク管理スキル、学生同士での評価経験 (OSCE など)

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・最後の実習なのに圧倒的知識不足で疾患の事を 1 から教えないといけない状態だった。養成校と相談し長期実習の到達目標から評価実習の到達目標に変更した。
- ・SNS で他施設に実習中のクラスメイトの悪口を書き、その施設の CE よりクレームあり。本人に事実確認し、本人は事実を認めて各所に謝罪。実習中止寸前までいったが本人の嘆願にて何とか実習を終えた。
- ・元々コミュニケーションに苦手意識があり、実習に対して不安が強い学生で本人からの発言がほとんどなかった。まずは指導者との関係づくりから始め学生に対し支持的な態度で接し、低い目標設定から始め正のフィードバックを繰り返し行った。それまでは見学のみ (患者さんと挨拶をするところから始める) とし少し自信がついてきてから実際に評価・介入へとすすめた。

感想

学生評価では、情意、精神運動、認知領域の中でも情意領域に偏っていることに気付きました。

- ・4-1 セッションで「重きを置いている点」では態度面の項目が多く上がったが、4-2 で3領域からあげてみると知識面・技術面でも多くの項目があがり、全ての項目が連動して実習が上手くいくのかなと思いました。
- ・学生の評価では指導者の主観が入り易く難しい部分もあったので、細かいスケールがあると指導者としても対応がしやすくなってくると思います。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 4 世話人氏名：中村 和也

GW 司会者：神崎麻理恵 記録者：関戸 馨 発表者：佐藤 純哉

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 学生自身が掲げた目標を達成できているか
2. 接遇、基本的な態度ができているか
3. 中間から最終評価にかけて学生自身の成長がどれくらいみられているか

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・自己紹介の学びたいことの達成に向けて、実習前から取り組んでいるか
- ・検査測定など学校で学んだことを実施できているか
- ・基本的な態度・挨拶ができるか、早め早めの行動ができるかによって、スタッフや患者様ともよい関係性が作れていく
- ・学校側からの目標が達成できているか ・プロフィールにかいてある意気込み
- ・患者様とのコミュニケーション ・学生の長所・短所をどう生かしているか
- ・見えてきた課題に対してどう取り組んでいくか ・患者の強みを発見できているか
- ・最終評価時と中間評価を比較してどれくらい学生自身に変化しているか
- ・最終評価は最終日の前日に行うと、翌日に改めて伝えたいことを伝えることができる
- ・患者様にとって意味のある作業を学生がしっかりとらせることができているか

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・態度面：一般常識・マナー、挨拶、臨床で学びたいという気持ち、守秘義務を守る
- ・知識面：様々なコミュニケーションの取り方、転倒防止などの評価、認知機能の評価、生活面の評価、リスク管理、危険物の管理
- ・技術面：練習し、頭の中でイメージしておく、いろいろな人を巻き込んでいく力、ROM、高次脳機能の評価、機能面の評価項目をあげられるようにしておく

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・コミュニケーションがうまくとれていない患者様に対して肩をつかむなどの行為
→学生に指導した
- ・駐車場の場所がわからない・時間に遅れるなど、事前の確認・相談ができない
→実習地訪問で今後の対応を確認（学生のキャラクターなどをふまえて）
- ・やる気はあるが、集中力がない学生について、本人と話す中で脳に疾患があったことが判明。事前情報はなかった→学校と情報を共有しておく
- ・前の学生のレポートをコピー&ペーストして提出してきた→学校に報告。本人も反省しており実習はそのまま継続した
- ・新患の患者にバイザーより先に接触していた→学校に報告

感想

実習での目標達成など成長過程に対して重点を置いているのが共通に認識していることであった。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 5 世話人氏名： 鎌田 秀一

GW 司会者： 柿田 紀子 記録者： 亀山真奈美 発表者： 田嶋ますみ

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点 (キーワード)

1. 指導者と学生とのコミュニケーション
2. 自己理解
3. 指導者と養成校との連携

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・社会性・コミュニケーション能力(挨拶、時間管理、言葉遣い、身嗜み、見学中の姿勢、多職種や患者様との関係づくり等)
- ・実習に対する姿勢(事前準備、積極性、メモをとる等)、デイリー等の提出物
- ・自己理解(自分の性格や、実習中の生活管理等)
- ・昼食時など休憩中の過ごし方

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと(態度面、知識面、技術面)>

- ・評価項目、手段の理解、評価の技能の練習
- ・デイリーやケースノートの書き方練習・テンプレート等学校からの情報
- ・実習領域の疾患に対する基礎知識の習得、実習でも活用できるよう知識をまとめる
- ・自分の振り返り(苦手なところ・伸ばしたいところ)
- ・実習での目標、学びたいこと
- ・実習をイメージして日頃の関わり方を見つめ直す
- ・実習中の生活についての工夫を先輩 OTS から情報頂く

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・実習中の急遽休みが多い学生→生活状況の把握、養成校教員に連絡し、3者で話し合う
- ・学生から指導者への言い返し→養成校教員に連絡し、学生に注意
- ・人と話すのが苦手で患者さんとの関係作りが困難な学生→教員も含め話合い実習終了
- ・過度に努力し過ぎてしまう学生→SV から具体的な課題設定を提案する
- ・カードキーをトイレに流した学生→それ以降学生はカードを持たないように対応した
- ・SNS で SV を非難→養成校に連絡し対応して頂く
- ・居眠りしてしまう学生→生活習慣を見直す、持ち帰り課題量を減らす

感想

- ・実際場面で予測されることの確認ができ、今後の対応についての参考になりました。
- ・学生の積極性や社会性を重視している先生方も多く自身の評価法を改めて考えました。
- ・学生評価を行う上で、学生・養成校などと細かな連携を図ることの重要性を学びました。
- ・学生評価を改めて考える良い機会になりました。
- ・学生を主体とした指導者や養成校の連携が大切だと感じました。
- ・指導者・学生・養成校との連携をとることの重要性を改めて感じました。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 6 世話人氏名：丹羽 敦

GW 司会者：岩永 桜子 記録者：吉村 千聖 発表者：田島 光広

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. コミュニケーション能力、意欲、実習を通しての学生の成長
2. 疾患別に対する評価・知識
3. 学校や指導者へ相談する

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・学生とのコミュニケーション、目配り、気配り、心配り。
- ・患者に寄り添っているか、患者への気配り、服装に気を遣っているか。
- ・意欲があるかどうか、自主性を一番に見ている。
- ・スタッフのアドバイスを素直に受け入れているかどうか、それを範化出来るか。
- ・挨拶、指導内容を生かしているか。指導後、その学生が修正出来るかどうか（柔軟性）
- ・学生が実習を通してどれくらい変化したか。（スタート地点からの伸び率）
- ・指導者がいるときと、いない時で他職種への態度に乖離がないか。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・体調管理面、評価法・物品（評価用紙・器具）の準備、練習をしてきてほしい。
- ・実習地分野の内容・制度についての理解。感染症対策についての基本的知識の理解。
- ・症例に対してどのような評価を行ったらいいか（適切な評価や取捨選択が出来る様）を理解してきてほしい。→症例毎の評価項目を挙げたノートを作ってきてほしい。
- ・身体機能分野において精神疾患がある方もいるので代表的な疾患についての理解をしてきてほしい。（逆の場合も然り）
- ・社会人としての挨拶やマナーを学生のうちに練習してきてほしい。
- ・学内での指導内容の理解度が学生によってばらつきがあるので平均的にしてほしい。

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・不安（雰囲気、対応、技術）が強く来ない→バイザーが早く気づき、気持ちをくむ
- ・遅刻する・電話するが電話にでない→来るのを待つ、指導をする
- ・評価用紙（家にもち帰っていた）を置き忘れる→理由を問う、学校での様子をきく
※対象者にリスクを伝える、学校との情報共有
- ・レク進行、発表の日は絶対休む（のちに精神疾患あり）→早めに学生の情報を知りたい
- ・症例と会話できず、立ったまま→コミュニケーションを重視する
- ・患者さんとの距離が近い→助言への反応がうすい→Yes/Noでの反応をみる
- ・居眠り→立ってもらう、セラピストの真似をするように動いてもらう

感想

- ・評価に重きを置いている点は技術的な面よりも自主性やコミュニケーションといった基本的態度に重きを置かれている SV が多い様です。
- ・学生には個人差があるためその人にあった指導方法が必要だと感じました。
- ・学生に問題が生じた場合はすぐに相談が必要だと感じました。
- ・実習前にコミュニケーション技術や評価法の理解など基礎的な部分の理解を深め評価の取捨選択が出来る様になってきてほしいとの意見が多かったと思います。また感染症予防に対する準備が必要との意見がありました。

演習 5

多職種連携

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 1 世話人氏名：久毛 希

GW 司会者：増田 恵

記録者：中村次郎

発表者：松尾 萌美

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンス
2. 会話の中での情報交換
3. 発言の意図の解説

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・担当者会議、カンファレンスへの参加の前に、OT としての専門的立場からの視点の説明を行い、その後にチームの中で OT がどのように動くかを知り、考えてもらう。
- ・カンファレンス・自立支援型地域ケア会議と一緒に参加し、OT としての役割を考えてもらう。
→他分野から発言を求められる内容は、そのままその分野に期待されていること
- ・カンファレンスは何度もないので、合間の時間に多職種との打ち合わせをみてもらう。
→立ち話とは異なる「ちょっとちょっとカンファ」を見てもらい必要性を解説する。
- ・情報収集：OT としてだけでは分からない事（退院後必要なサービスなど）を、学生に考えてもらい、それを入手するためにどのように多職種から得るのか考えてもらう。
- ・今後どのような生活を目標に進めるか、退院後の支援など他職種の意見をもらうなど、OT だけでは成り立っていないことを感じてもらう。
- ・1人のケースで具体的な介入例を挙げる。
- ・訪問看護やデイケアなど、OT 単独で関わっていない治療行為に実際に入ってもらう。
- ・カンファレンスに参加し、それぞれのスタッフの報告の意図を解説する。
- ・多職種が混在する部署での何気ない会話を聞いてもらい、その意図を解説する。
- ・Dr・Ns との打ち合わせでは専門用語が多いため、基礎的な専門用語の説明を行う。復職に関しては OT が調べて Dr へ提案していく。

感想

- ・カンファレンスの形式は施設ごとになるので、学生が進路を決める材料となるのではないかと感じた。
- ・多職種連携について学生に知ってもらう方法として、他の人の例を聞き、色々な方法があることがわかった。
- ・日常の何気ない会話の中でも学生の前で専門職の意識を常に持っていなければならないと感じた。
- ・OT の専門性だけでなくチームで治療しているということを学生に伝える大切さを改めて感じた。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 2 世話人氏名： 田中 剛

GW 司会者：竹原 大朝 記録者： 中島 彩乃 発表者： 西 拓郎

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 他職種と会話する場面を見てもらう（日頃の会話の中にポイントあり！）
2. 作業療法士の視点を見てもらい、具体的に伝える
3. 連携先(看護師・CM など) を意識した伝え方、伝える内容について学生に具体的に指導をする

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・職員内カンファレンス（本人家族は入らない）→入院生活の様子や今後の目標などを共有する場の見学
- ・離床ミーティング→昼食を車椅子（端座位）で食べられるか評価する
- ・食事の様子を巡回する→食事の姿勢、食事形態などの確認を数名の OT で巡回し話し合いを行う→その場を学生にも見学してもらう
- ・退院前のカンファレンス（他職種も含めて話し合う場）→OT としてどのような発言をするかなどを伝える様になっている
- ・他職種向け、看護師向けなど伝え方が異なる場合もある→相手の職種への理解をしながら伝える場面を見学してもらう
- ・カンファレンス場面で OT の発言内容→患者が出来ている点など良いところを伝える
- ・デイケアで入浴とリハビリの時間が重なってしまう場面がある
→他職種の予定を尋ねてコミュニケーション場面もみてもらう
→小さいことだがそのようなコミュニケーションの積み重ねが重要であることを伝える
- ・転倒予防教室に参加した際に地域の特性に応じた関わりができる事をみてもらう
→小さな積み重ねから情報を得ることができ、他の患者さんに汎化できることを伝える
- ・訪問看護の場面を見学してもらう→看護師の業務内容や役割の見学
- ・学生に具体的に伝える→説明をするところまでが大切、学生も参加しているということ伝える（指導者も意識する、学生もチーム医療の一員である）
- ・学生も病棟について行き実際場面を見学してもらう

感想

学生にカンファレンスに実際に参加してもらうだけでなく、その前・後に詳細な説明や意図を伝えていく必要があると感じた。（学生もチーム医療の一員という意識を指導者も持つ必要がある）

病棟スタッフとの小さなやりとりを通し他職種との連携に繋がることを伝えていく必要がある。

伝える相手に応じて発言する内容や言い回しが異なることも理解してもらう重要性を感じた。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 世話人氏名： 丹羽 敦

GW 司会者： 山田 ひとみ 記録者： 小田 和徳 発表者： 澤瀬 穂

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 日常的な・定期的なカンファレンスへの参加
2. 家屋調査や退院時訪問への参加
3. 動作指導などの専門分野での情報発信

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・朝礼や終礼の申し送りで職種の日々の役割をイメージさせる・患者様の状態を知る
- ・カンファレンス以外で日常的な申し送りをどのようにしていくか申し送り表などの活用
- ・申し送りやサマリー等書類の説明
- ・ベッドサイド掲示の目的や内容の説明
(ADL能力を示した表・目標の掲示・リハ時間掲示・ポジショニング)
- ・ケースカンファや地域担当者会議、サービス担当者会議や退院前カンファの参加・体験
- ・軒下カンファの見学

- ・可能であれば退院前訪問指導や退院後訪問への参加
- ・家屋調査への同行・見学
- ・自宅訪問への同行(動線確認や手すり等の検討など、学生と一緒に確認)

- ・ADLの動作確認(通所：介護士や看護師と利用者様のADL動作を情報共有)
- ・病棟スタッフへの移乗・歩行デモ場面の見学

- ・初日のあいさつ回りで各職種の特徴、顔名前を説明する
- ・院内での職種別の勉強会への参加
- ・施設見学の際に他職種も一緒に同行
- ・カルテを用い各職種との相談記録での説明
- ・他職種への情報収集(指導者が実際行っている場面の見学や学生にも経験してもらう)

感想

定期的なカンファから日常的な会話まで多職種との情報交換の場は多岐にわたっていて、OTの立場からの情報発信・収集の場面をその意図を解説しながら学生に体験してもらうことが大切であると感じた。また同様に、チームの中での他職種の役割についても知ってもらい、それぞれの場面で、誰が自分の知りたい情報を持っているかについて理解してもらう必要があると感じた。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 4 世話人氏名：内田 智子

GW 司会者：関戸 馨 記録者：佐藤 純哉 発表者：福井 志織

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンスへの参加
2. 各職種の連携場面の見学
3. 担当患者の実際を報告

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・作業療法委員会に参加
- ・病棟カンファに参加
- ・多職種に情報を一緒に聞きに行く
- ・SW、栄養士等とも話し合い、リハ以外の時間の過ごし方を共有している（コロナでカンファレンスが減り、問題の共有が伝達に代わっている）
- ・事前に多職種に聞きたいことを聞いておく
- ・PT・STの実際の場面の見学をさせてもらう
- ・職種間で問題点や到達時期を共有する場面（個別のやり取りが増えている）
- ・家族等に聞きたいことを事前に聴取し、その場面を見学してもらう
- ・カンファレンスの場面を見てもらう
- ・多職種に説明してもらう
- ・多職種と連携するプログラムに参加してもらう
- ・リハ回診時に担当患者の現状を報告する場面を見学してもらい、その後実際に報告してもらう
- ・少人数でのケース発表会への参加 ・リハスタッフ内での発表 ・大勢の前での報告
- ・ケアマネージャーがリハ室に来た際に自宅状況を確認する

感想

- ・多くの施設が病棟カンファレンスへ学生を参加させている。
- ・多職種との連携場面を見学しながら、実際に質問、報告をする場面を作るのはいいのではないかと思う。
- ・多職種の意見が聞ける場面はいいのではないかと思う。
- ・コロナ禍での対応が今後の課題になってくるのではないかと考えた。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 5班 世話人氏名： 大坪 健

GW 司会者： 山口 良太 記録者： 柿田 紀子 発表者： 山本 珠美

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 実際の生活場面
2. 専門性の理解
3. 話し合いへの参加

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・実習開始後 1 週間は病棟へ入り生活を見た上で、現場の多職種に情報収集する。
(学生の方から、患者の詳細情報を得ることもある)
- ・合同ミーティング、カンファレンス(毎日)に、学生も積極的に参加してもらう。
- ・日々の ADL についてもらい、多職種と連携する場면을直接みてもらう。
- ・家屋調査に同行させ、家屋改修に関する多職種(ケアマネ、業者、家族など)との連携をみてもらう。退院前カンファにも参加し、OT としての発言も聞いてもらう。
- ・多職種の実際の仕事場面(Ns の移乗、食事など)も見学させてもらう。

感想

- ・他施設での関わり方を聞くことができ参考になりました。また、実際場面で他職種の仕事を見学する等し、仕事内容を理解することも大切だと感じました。
- ・他領域の関わり方を知ることができてとても勉強になりました。
- ・施設間でカンファレンスに参加する職種が違い新鮮でした。その職種がこういった役割を担っているのかを理解する事が大切だと感じました。
- ・他職種の仕事内容を知らないと、どんな質問や情報交換ができるかが分からないので、多職種の仕事を知り専門性を理解する事が大切だと感じました。
- ・チームの中で OT が動いていること、そこでの OT の専門性を伝えることは大切だと思いました。
- ・他領域での OT の関わり方、また個々の施設・病院での独自の関わり方を知ることができ、とても参考になりました。各領域においての多職種との連携の必要性を改めて感じました。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 6 世話人氏名： 桑原 由喜
GW 司会者：徳永 幸恵 記録者：原口 卓也 発表者：飯野 理恵

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンス
2. 他職種の役割やつながり
3. 多職種が連携している実際場面の見学

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・カンファレンスに参加してもらう
- ・食事場面などで看護師などとの連携を見学してもらう。
- ・クリニカルパスに参加してもらう。業務の中で他職種との連携をみってもらう。
- ・退院前訪問、退院後訪問などに参加して院外の職種との連携を見学してもらう。
- ・退院支援カンファレンス、デイケアに入ってもらい、他職種の連携を見学してもらう。
- ・事業所内のカンファレンスや担当者会議に参加する。介助場面なども見学する。
- ・発達分野では保護者との会話にも見学に入ってもらう。
- ・看護師やPSWなど普段の様子なども知ってもらう。
- ・回復期入院中に退院後の施設なども見学してもらう。
- ・訪問看護に同行してもらい各職種の役割や強みを学んでももらう（例：看護師→バイタル、服薬、PSW→サービス、社会資源、OT→コミュニケーション、精神的な相談役、サポートなど）
- ・カンファレンス以外でも、日ごろのスタッフ同士の会話から連携を見学していく（より日常的な必要な情報が得られるのでは）。
- ・一日対象者の方と過ごして頂き、他職種がどのような介入を行っているか観察してもらう。後でOTが何の為にしていたかフィードバックを行い、OTで対応できない部分は他職種に直接情報収集を行う。

感想

患者を中心とした、他職種の役割や、つながりなどを学ぶ場面が多かった。カンファレンスの実際の場면을学生に見学してもらうことが大切であると思う。そしてカンファレンス以外でもコミュニケーションを多くとることにより他職種間で良好な関係が築けるのではないかと思う。

演習 6-1
MTDLP によるマネジメント過程
の実践

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 1 世話人氏名： 末武 達雄

GW 司会者：中村 次郎 記録者：松尾 萌美 発表者：二瀬 祐介

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. 成果の可視化
2. 広い視点への転換
3. MTDLP の説明と同意(使用目的の明確化)

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット

- ・わかりやすく、実習生に説明しやすいので学生の負担軽減になりやすい。
- ・成果を物理的に「残す」ことができる。
- ・指導者の力量の差を少なくして、学生に指導できる。
- ・セラピストの治療介入方法について可視化できるため、読み解き、自分ならこうするという主体性を発揮しやすい。
- ・実習中だけという学生の狭い視点を、その方の今後という広い視点に転換できる。
- ・ICF とリンクしているため、わかりやすい。
- ・個人因子や環境因子など、今まで見落とされがちだった項目にも目がいきやすくなる。
- ・学生が対象者に行う評価等が可視化できるため、学生自身の達成感につながる。
- ・構造化されている手法で、学生自身が患者さんを見やすくなる。
- ・学生と一緒に考えるツールとして有用である。

課題

- ・指導者自体の経験が浅い。
- ・対象者が限られるのではないか。(若い患者など)
- ・全ての患者において、シートの全項目が埋められるわけではなく、MTDLP の対象となりづらい患者もいる。
- ・シートを埋める作業に追われる学生も出てくるのではないか。
- ・目の前の作業に追われて患者さんとの実際の関わりが疎かになる恐れあり。

感想

MTDLP を使用する意義や目的についてはわかるが、実際に用いることに関しては、セラピスト自身のスキルアップ等、まだまだ課題があると感じている人が多いようだった。課題もあるがメリットもわかったのでは是非取り入れていきたいと思った。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 2 世話人氏名： 久毛 希

GW 司会者：古賀 善彦 記録者： 西 拓郎 発表者：馬渡 立臣

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 思考の可視化
2. 領域によって介入の難しさ
3. 指導者の経験による差

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

（メリット）

- ・視点が広がる（身体機能面だけではなく活動参加など幅広く見る事ができる）
- ・OT の思考を可視化できる
- ・問題点や目標などのつながりが理解しやすい。（途中経過がわかりやすい）
- ・OTS を含めて役割を明確にできる
- ・社会支援までの流れが分かりやすい（申し送りを含めて）

（課題）

- ・指導者側の理解度が重要になる
- ・OTS の能力に差がある為、指導者側が見極めながら介入する必要がある
- ・実務と並行して行う必要がある為、負担が大きい（実務と指導のバランス）
- ・精神科：能力と目標が乖離している人には難しい可能性がある
- ・精神科：集団への介入が多く、全ての人を個別で対応し導入するのは難しい
- ・「コミュニケーションがとれる」、「回復が見込める」など条件面で対象者を選定することが難しい部分がある

感想

学生にとって身体機能面など部分的なところに目がいきがちだと思いますが環境因子や個人因子など視点や思考を広げて考えることの重要性が可視化できるので指導しやすいと思います。しかし、指導者による差が出ないように、MTDLP に関して経験を重ねて理解を深めるようにすることが必要であり責任があると思います。また、領域によっては取り入れることの困難さがある為、今後の課題にもなると思います。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 3班 世話人氏名：丹羽 敦

GW 司会者：小田 和徳 記録者：澤瀬 穂 発表者：木崎 康

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. 説明のしやすさ
2. 学生の理解度の明確化
3. 指導者側の理解力の重要性

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

○メリット

- ・実際の患者様で評価をすることができる。
- ・目標や能力・環境などを視覚化することで整理や説明がしやすい。
- ・目標が決まっているから問題点やプログラムを立てやすい。
- ・学生が気づいていないところがわかりやすい。
- ・学生も患者様自身も目標が明確にできるので意欲につながる。
- ・機能面に視点が行きがちなので、対象者の生活歴を知る手段になる。
- ・MTDLP のプロセスを利用して今、評価・介入のどの段階なのか説明しやすい。
- ・OT としての視点を伝えやすい。
- ・指導者の視点や学生さんの理解度が可視化しやすい。
- ・評価の目的を共有しやすく、基本評価を全てとらないことで対象者の負担も軽減する。
- ・OTS と対象者のラポール形成につながる。
- ・立案後の途中経過などで内容の修正などの経過を追うことができる。
- ・卒後すぐに使えるので学生のメリットが大きい。
- ・活動・参加を意識した実践が学べる。

○課題

- ・MTDLP を理解していない患者に対して実施するので、意図した答えをもらいづらい。
- ・指導者側の MTDLP のプロセスを理解しておく必要がある。
- ・療養病棟などでは長期入院の患者さまなど MTDLP の適応が難しい。
- ・MTDLP の経験が指導者側も必要になり、習熟度がないと指導が難しい。
- ・指導者が介入に活用・実践できることが必要。
- ・実際の臨床場面でもまだまだ浸透していない。
- ・精神科や小児などではそもそもの MTDLP 事例が少ない。

感想

目標や能力などについて視覚化できるので整理や説明がしやすく、問題点やプログラムを立てやすいと思う。また、経過を追うことも出来るため患者様本人の意欲の継続にもつながる。しかし実際の臨床場面では使用経験が少ないこともあるため、指導側の理解度も重要であると感じる。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 4 世話人氏名： 内田 智子

GW 司会者： 佐藤 純哉 記録者：福井 志織 発表者：下村 太郎

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点 (キーワード)

メリット	課題
1. 目標を定めやすい	1. 指導者の経験値
2. 指導者自身の振り返りになる	2. 急性期や精神分野では難しい
3. 表やシートになっているため記入しやすい	3. 時間がかかる

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット

- ・ 目標を立てやすい
- ・ 表やシートになっているため学生が記入しやすく、要点を整理しやすい
- ・ 治療するうえで計画立案しやすい
- ・ 目標に向かっての課題が明確となりプログラムを設定しやすい
- ・ 指導者の考えも反映されるため、プランが立てやすい
- ・ 学生が掘り下げて評価することができる
- ・ 学生と一緒に考えることで指導者自身の振り返りにもなる
- ・ 対象者や学生の負担軽減になる

課題

- ・ 時間がかかってしまうのではないかと
- ・ 学生のうちに基礎的な内容を理解してから臨床での応用に入るほうが良いのではないかと
- ・ 対象者と目標を共有することが難しい場合がある (病識・認知機能低下の有無など) ので、対象者の選別などが必要なのではないかと
- ・ 精神科の急性期では目標設定を対象者に委ねることが難しい
- ・ 指導側が MTDLP をしっかり理解してから学生に説明する必要がある
- ・ 地域では高齢者との関わりは多いが、実際に家屋調査した際の現実と対象者の思いとのギャップが大きいことがあり、目標のすりあわせが難しい

感想

学生自身は表やシートを用いることで目標設定やプログラム立案を行いやすくなり、また対象者も評価のり・スタートが少なく負担軽減になるのではないだろうか。しかし、対象者の選別や各分野によって MTDLP をどう活用していくのかは今後工夫が必要になってくる。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 5班 世話人氏名： 大坪 建

GW 司会者： 田嶋ますみ 記録者： 山口 良太 発表者： 亀山真奈美

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. 問題点や目標の可視化
2. 全体像の捉えやすさ
3. 時間的配慮

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット

- ・シートが多く、可視化できるため指導者と学生が共通認識をもちやすい
- ・作業療法の流れに一貫性があるため、伝える方も伝えやすい。
- ・目標が明確になり、今足りない事がわかりやすい (トップダウンの思考)。

課題

- ・通所は毎日通うがリハビリは週に 1 回しかないため対象者を十分把握できない。
- ・シートが多いため、学生も指導者も時間がかかる。
- ・患者の状態が変化しやすいためプラン通り進みにくい。
- ・指導者側の理解が足りない。

対応策

- ・学生の実習開始前に症例を絞り、ある程度シートを記入しておく。
- ・施設内で勉強会 (MTDLP に沿った症例検討) をする。
- ・部分的に効率的に使用する。

感想

- ・ MTDLP における指導者の理解や経験値が必要となり、自分の領域でどう活かせるか実際に活用をしてみる必要性を感じました。
- ・実習で使用するためには指導者の経験値が必要です。今後、積極的に活用していきたいと思います。
- ・学生に指導するにあたって、指導者の知識・理解がより必要になると感じました。精神科での MTDLP の使用は難しいイメージですが、うまく活用すれば学生も使いやすいツールだと感じました。
- ・可視化は指導する上で共通理解を得やすいと思いますので、効率的な使い方を模索しながら活用できたらと思います。
- ・ MTDLP の活用は時間的制約がある中で難しいと思っていましたが、部分的に活用するなど使用法の工夫が必要だと感じました。
- ・ MTDLP は時間を要し実際の臨床では導入しにくい印象がありましたが、実際の使用例などを聞き工夫することで有効に活用できることを知りました。今後、活用していければと思います。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 6 世話人氏名： 桑原 由喜

GW 司会者：原口 卓也 記録者：飯野 理恵 発表者：岩永 桜子

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. メリット：目標・見通しがたてやすい
2. メリット：可視化することで理解度が深まる
3. 課題：対象者がしぼられてしまう

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

【メリット】

- ・学生が何をしたいのか明確になるため見通しがたてやすい
- ・学生の視野が広がる
- ・その後の生活のイメージがつきやすく、IADL など漠然としていたものが明確になる
- ・指導者だけでなく学生自身もどうということが分かっていないのかといった理解度が把握しやすい
- ・対象者の全体像がとらえやすくなる
- ・機能面に目が行きがちだが、活動と参加にも視野が広がる
- ・情報収集能力の把握ができ、指導しやすくなる
- ・可視化することで双方にとって分かりやすい
- ・指導者と学生とのディスカッションにより学生の考えが伝わるため指導しやすい

【課題】

- ・患者の病識が乏しいと時間を要し困難である
- ・評価や記録シートが多いと書類が余計に増え負担となる
- ・対象者がしぼられてしまう（合意目標の理解が困難な方には不向きではないか）

感想

- ・可視化することによって目標や全体像が捉えやすくなって身体機能に目が行きがちな学生の考えも広がるのではないかと（個人因子や環境因子への理解度が深まる）。
- ・対象者が制限されてくる（認知機能の低下が重度にある方など）。
- ・メリットも多いが書類が多くなると業務の増加につながるのではないかと。

演習 6-2

事例報告書の作成

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 1 世話人氏名：末武 達雄

GW 司会者：松尾 萌美 記録者：二瀬 祐介 発表者：大平 健二

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 根拠の記載（事例報告書作成時）
2. 思考の言語化
3. 学生の考えを表出する機会の提供

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・MTDLPのような構造化されたものを用いてまとめてもらう
- ・対象者（患者）ではなく、指導者の評価分析をしてレポートにする
→ある活動の一部を切り取り、指導者の動きや思考を学生にまとめてもらう
- ・先に指導者が書いた見本をみせて、学生に説明する
- ・評価をおこなった意味や理由の確認を行う
- ・学生とのディスカッションの中で、動作や評価の理由を入れていく
- ・学生と SV の思考過程の違いを別々に残していく
- ・トップダウン形式にしてまとめる
- ・そもそも事例報告書ではなくて、実習で何を学んだかなどをまとめた報告書だとやりやすいかもしれない

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

詳細な事例報告（レポート）を書くだけではなく、学生の臨床思考過程の理解についてより良い確認方法はないか。レポート無しでも確認できる方法はないか。

- ・会話の中で確認する
- ・PT とディスカッションを交わしていく（学生自身の考えも含めて）
- ・活動時の学生自身の立ち居振る舞いを言語化してもらう
- ・患者さんの反応を通じて学生の理解度が分かるということもある
- ・表出が不得手な学生さんには文章での意見交換も効果的
- ・デイリーノートを通じて確認すれば、学生の負担も少ない
- ・その都度その都度学生と確認していく
- ・指導者の治療行為の意図を客観的に推察して話してもらう、又は箇条書きなどで残す
- ・類似したケースに対する治療介入の仕方判断する。

感想

- ・少しずつ指導者自身の実習に携わる考え方を変えていく必要がある。
- ・「事例報告書」というネーミングに捉われすぎると、ついついケースについてまとめないといけないという意識が強く働く。実習で何を学んだのかということ報告しやすいように指導者側もまとめ方について柔軟な思考があってもいいのではないかと考えた。

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 2 世話人氏名： 村木 敏子

GW 司会者： 西 拓郎 記録者：竹原 大朝 発表者： 森 陵輔

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 個人情報の強化
2. まとめる力（口頭で）
- 3.

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・①対象者のニーズ ②個人情報 ③合意目標（実現できるのか）
- ・評価のところで予後予測があれば良い。
- ・プログラム導入に対する考え。（考察の中で記載する）
- プログラム立案の所で導入理由も記載するとわかりやすい。
- ・考察のみで対象者像が全てわかるように記載するのはどうだろうか。
- 項目が分かれていた方がわかりやすいかもしれない。
- ・生活歴（個人情報）の項目は目標やプログラム立案に役立てることができる。
- 一般情報と医学情報の間に入れてはどうか。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・文章で書くことは難しくなるので、会話の中で説明してもらおう。（自分の言葉で表現す。医療用語を使わなくても良い。）
- ・日々の変化を他者に伝える。（担当のNsなど）
- 自分の知識の整理につながる。
- ・バイザーが休みなどでいない時に、他の OTR に現在の状況を伝えてもらう。
- ・カルテ記載を一緒に行うことで考えをまとめる力になるのではないか。
- OTR の指示で OTS がカルテ記載することで、OTS が OTR の思考を理解できる。
- カルテにはどのような内容を記載するか尋ねることにより理解できる。

感想

事例報告書に生活歴（個人情報）を充実させることで目標やプログラム立案など考えをまとめやすくなる。
レポートではなくても学生の臨床思考過程を理解するためには口頭でも（会話の中で）確認できると思う。

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 3 世話人氏名：久毛 希

GW 司会者：澤瀬 穂 記録者：木崎 康 発表者：谷口 友仁

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 患者様のニーズ、希望
2. レポートの形式
3. CE と OTS とのすり合わせ

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・症例報告、活動報告、MTDLP形式などいくつかからCEとOTSで選択できる様式
- ・活動報告ではCEの行っている仕事の流れからOTの役割や治療効果の検証など、実際の業務を説明させOTの思考をどのくらい理解出来たかを述べてもらう
- ・活動報告の中で特定の手技や技能（心理教育や認知行動療法、認知リハ、復職支援など）に焦点を絞った報告も可
- ・治療プログラムを行った後の考察を経ての、再度プログラムの変更
- ・患者様と面接をして目標をたてた過程や学生の思い等も内容にいれたらどうか、また事例を担当していく過程で学生がどういう思いで考察したか感情の変化等にも着目する
- ・実際の OT 介入ではまず本人と目標を共有してから目標に関する実際の問題点を整理しアプローチ方法を考えていく思考過程があると思うので、報告書にまとめる際も基本情報（ICFの項目に沿って）⇒本人のニーズ⇒目標⇒問題点⇒アプローチの順で記載すると実際のアプローチに至るまでの思考過程が整理しやすいのではないかと

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・レポートに書く前にOTSがどのような考えを持っているかを話し合う。
- ・ある程度関わった患者のICFを書いてもらい、CEと確認する
- ・ICFのまとめについて点数化し合格ラインを決めておく（理解度が上がればOK）
- ・観察項目を決めておき、実際に動作や生活状況を確認する作業を繰り返す
- ・ケースノート形式にまとめる（生活歴や現在の二ードの聴き取り、ICFにまとめる）
- ・レポートにまとめる作業だけでなく、見学に入った場面で担当セラピストだったらどのような評価や関わりをしたいか一緒に考える。
- ・学生が実際の現場で働いている状況をイメージしてもらう機会を意識して作り模擬的な臨床思考過程を経験してもらい感想やむずかしさを共有することで理解度を確認する。
- ・事例報告書を担当した患者様以外のICFかMTDLPの記載を指導者と一緒に行いながら、どれだけの事が考察できているかをみる

感想

OTSが患者様のためにどのようなことを考えているかを知ることが大切だと思いました。そのためにはレポートを書く前にケースノートや振り返りでOTSと意見交換を行うことが必要だと思いました。

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 4 世話人氏名：内田 智子

GW 司会者： 福井 志織 記録者： 下村 太郎 発表者：井手 瑛俊

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 生活を見据えた評価を重視
2. 学生本人の理解度の確認や指導者の情報の引き出し方
3. 早め早めのフィードバック

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・レポートの流れを細かくするが、計測数値や方法について深入りせず、全体像を捉える
- ・一つ一つのアセスメントすべてに精通する必要はない
- ・「歩けない」などの活動において必要な評価を重視する
- ・「その人らしさ」を大切にす
- ・機能面を重視していたが、在宅に戻ってからの生活を見据えた評価に変わっていく視点
- ・対象者のどういった部分に焦点を当てるかが見えるレポート
- ・学生は問題点に目が行きがちなので、本人の強みに焦点を当てるように指導
- ・評価に視点が向いていると指摘を受けたので、活動や参加に目を向けるようになった

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・口頭で説明してもらうことで指導者だけではなく学生自身も理解度を確認しやすい
- ・一回ずつの関わりを大切にする
- ・見学—模倣—実施において、類似した症例で振り返ることも大切
- ・一人一人の患者さんとの関わりを丁寧に振り返り、予後予測なども一緒に確認していくことを心がけている
- ・その日のうちにデイリーやケースノートを合間に作ってもらい、その日のうちに不明点など整理してもらい、振り返るように指導する
- ・レポートがなければ口頭説明が必要であり、指導者考えを伝えることが必要
- ・学生がどんな質問をしたいのか、内容が明確になっていれば、臨床思考ができていく証になる
- ・関わっている人の予後予測ができる、できなければ指導者が教示する必要がある
- ・本来は都度ディスカッションできればいいが、時間的な制約があるため、学生自身が振り返る時間を設けるようにする
- ・学生が考えられるよう指導者がヒントを与えることが大切である
- ・聞かれると答えられるが、自分から発するのは難しいので指導に工夫が必要である

感想

参加型実習になる以前からレポート作成や思考過程の流れを大切にされている先生方が多かった。指導者が学生の理解していることをどう引き出していくかが大切だと感じた。

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 5班 世話人氏名： 大坪 建

GW 司会者： 柿田 紀子 記録者： 田嶋ますみ 発表者： 亀山真奈美

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. アウトプットできる環境を作る
2. 他のスタッフとの連携
3. トップダウン的思考で記載する

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・生活歴や個人因子から記載することで、その人を捉えやすく生活行為目標に至るまでの流れも理解しやすい。（項目の順番も考える。）
- ・デマンドやニーズを記載する。
- ・身体機能面から記載すると重要な点を見落としやすいため個人因子等をはじめに記載し、課題や治療プログラムを載せたほうが理解しやすい。学生も理解しやすい。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・実際に、フィードバックの中で確認する。
- ・模倣段階で理解し、学生自身がそれを行えるか確認する。
- ・対象者だけではなく、他患者様にも技術等を汎化できるかどうかを確認する。
- ・学んだことや反省点、気づき等を学生にデリーノート等を利用しアウトプットしてもらおう。
- ・他 OT や他職種スタッフから学生に OT のことや症例のことに関して質問してもらおう。
- ・検討の場を設けてスタッフから意見をもらおう。
- ・代行スタッフに確認してもらいたい点を伝える。

感想

- ・従来通りの方法をそのままではなく、OTらしい思考を実習で学べるように指導者側も考えていく必要を感じました。
- ・学生の理解度を知るために、他スタッフに協力を依頼する、ツールを用いる等様々な方法を知ることができ良かったです。OTらしさを伝えるための工夫も大切だと感じました。
- ・レポートを作る際、何を伝えたいかや何を重視しているかがわかりにくいため、患者様のデマンドやニーズを先に書き出すことによって読み手も理解しやすいと感じました。
- ・OTの思考過程を学生に教える際には、事例報告書の工夫や他スタッフを巻き込んだ指導が必要なのではないかと感じました。
- ・学習効果、学生の理解度を知る方法の一つとしての報告書の考え方・書き方が参考になりました。
- ・学生の理解状態を確認するには、口頭で聞くこととレポート以外を意識したことがなかったのですが、今回皆さんの他の方法に関する意見を聞いてとても参考になりました。

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 6 世話人氏名：桑原 由喜

GW 司会者：飯野 理恵 記録者：岩永 桜子 発表者：吉村 千聖

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 従来からの内容が必要
2. コミュニケーションを通して考えの伝達・把握・理解・共有を図る
- 3.

グループワークで議論された内容

<事例報告書を A4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・テーマ（着眼点）、病前の状態を記載する
- ・本人がしたいこと、やりたいことを聞いて、その後の経過を記載する
- ・ニーズ、デマンドを含めた全体像
- ・問題点となる部分（抽出した理由をふまえて）
- ・家族やその人を取り巻く環境
- ・評価の前に目標を考えて、目標に至るまでにどういった評価を行った方がよいのかを学生に考えてもらい、アプローチを検討し実施する順番がいいのではないか

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・デイリーノート、ケースノートの活用
- ・コミュニケーションの中で、バイザー自身も悩んでいることを話し共有していく。教える側と学ぶ側が同じ目線で進んでいく
- ・学生自身がわからないことがわからないということが多いため、対話する時間を多くとる
- ・他のスタッフに学生に質問をしてもらい、学生自身が理解しているか確認を行う
- ・中間評価を行い、学生自身の自己評価とスタッフの評価をすり合わせて修正していく
- ・評価の数をこなす
- ・模擬事例を例にして、学生に対し目的の説明やフィードバックを行う
- ・他のスタッフも含めて討論会を行う
- ・言葉で上手く表現できない学生に「コミュニケーションノート」を活用し悩みを書いてもらう。問題解決まで記載出来れば、学生の思考もわかるのではないかと感じた。

感想

MTDLP に移行したとしても、中身は従来からの内容が必要である。コミュニケーションノートなど色々な方法を活用して学生とコミュニケーションをとっていくことが大事だと感じた。

演習 7

作業療法参加型臨床実習の理解

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 1 世話人氏名：末武 達雄

GW 司会者：二瀬 祐介 記録者：大平 健二 発表者：延 祐樹

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生目線の事前準備（目的、技術、視点）
2. 業務時間内に学生が自由に使える時間を設ける（資料作成や調べものなど）
3. 指導者の業務のスマート化（指導者、学生ともに）

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

*見学レベル

- ・どの角度から見学したら見えやすいかを伝える。（ポジション取り）
- ・自分にとっても嬉しい声掛けを意識してもらう。
- ・身体レベルが高く対人交流が良好な方など、学生が失敗するリスクの少ない患者を対象に行う。
- ・学生や他のスタッフに協力してもらい、MMT の基本技術を事前に見てもらう。
- ・見学前に学生と一緒に目的や手技を確認する。
- ・視点の確認：MMT を行う際に、セラピストが両手で患者のどこに触れているのか、どのような声かけをしているかなど、細かいポイントに着眼する意識を持ってもらう。
- ・評価の目的・リスクについて事前に学生と共有する。
- ・あえて先に結果を伝えておく。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・介入中にフィードバックする必要がある。
- ・カルテ記載の時などに一緒に振り返りながら文章に起こす。
(セラピストにカルテを書く時間があるように、学生にも机上の学習時間を与える)
- ・家に帰って行う必要があるようなプラスアルファの課題を与えすぎない
- ・業務終了時にはすぐに帰宅させ質問は翌日に答えられるようにまとめてきてもらう。
- ・指導者側の業務整理と実習指導に対する事前のシュミレーション（指導時間の確保）
- ・研修を受け指導が行える指導者を増やし、1 対多、多対多で関われる職場環境づくり
- ・デイリーノートはその日のうちに作成してもらい、時間内にフィードバックするなど業務時間内に学生が書類作成できる時間を設ける。

感想

- ・実習生を受け入れるにあたって、施設側・指導者側の事前準備が要求されることを確認できた。
- ・実習中の時間の使い方・作り方を考えることができた。
- ・指導者が一人では難しいので指導者研修を複数人受けてもらい分業する必要がある。
- ・学生ができるだけ業務内に終えられるよう、指導者が学生に対する課題の与え方やフィードバックの仕方を工夫する必要があると感じた。

報告書：演習7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 2 世話人氏名：村木 敏子

GW 司会者：中島 彩乃 記録者：森 陵輔 発表者：西 拓郎

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 細かく分かりやすく説明する。
2. 事前に心の準備をしてもらう。
3. 長時間のフィードバックは避け学校と連携を取り職場全体で学生指導に取り組む

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

（見学場面）

- ・対象者の疾患・検査肢位を事前に伝える。
- ・その検査を実施する理由を説明する。
- ・リスクを事前に説明する。（禁忌肢位など）
- ・コミュニケーションの取り方の指導。（声掛けの仕方など）
- ・評価の要点を簡潔に伝える。
- ・検査に要する時間を伝える。
- ・学生の理解度の事前チェック（移動軸、基本軸や抵抗をかける部位などの基本的知識）
- ・前日に評価予定を伝える。
- ・MMT 終了後のフィードバック（それによってプログラムを行う理由など）
「この筋力が上がるとこういった動作が出来ますよ。」などの説明→意欲につながる。
- ・回復過程の変化を見逃さないようアドバイスする。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・学生が課題や日誌を勤務時間内でまとめる時間を作る。（文献などの調べ物も含む）
- ・学生が課題に要する時間配分や合計時間を聴取する。
- ・フィードバックでのディスカッションをデイリーノートでのまとめに代用する。
- ・質問やまとめる時間を患者様への介入の合間に適宜作る。
- ・的を絞った自宅学習を促す。（「明日のためにここを勉強して下さい」など）
- ・長時間のフィードバックを避けて学校側と相談する。
- ・OTS にも理解を求め、受け身にならず積極的に意思を伝え実習をすすめる。

感想

評価前に事前に検査や対象者のリスクなどの要点を学生に伝え、心の準備をしてもらうことで基礎知識を整理してから評価場面に挑むことが出来るのではないかと考えた。それにより、学生も要点を絞り効率よく見学できると思う。

また、指導者側も、学生が課題に費やす時間を既定の時間内に収めたり、学校側との連携を図りつつ効率的なフィードバックを行うなどの工夫が必要であると感じた。こうした関りを職場全体で行っていく必要があると考える。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 3 世話人氏名：久毛 希

GW 司会者：木崎 康 記録者：谷口 友仁 発表者：中村 有希

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点 (キーワード)

1. 基本情報の確認(リスクを把握)
2. フィードバックを繰り返し確認作業をする
3. タイムリーで効率的な臨床実習

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

(模倣レベル)

- ・事前に痛みや脱臼などリスク面の確認を行う。
- ・疾患と動かし方、痛みなどリスク面の説明と確認を行う。
- ・患者様の事前情報(疾患、リスク)の確認を行う。
- ・見学で理解した内容を学生なりの言葉で説明してもらい、模倣のレベルを決める。
- ・模倣レベルでの実際の流れをCEとシュミレーションしておく(OSCE形式)。
- ・実施レベルになるにはどのような点が足りないか確認し次の学習につなげる。
- ・リスクの理解度を確認して指導者の立ち位置等を見学してもらう。
- ・改善点をフィードバックした後に再度実施し、改善できているか確認を行う。
- ・不快な触れ方などを実際に経験してもらいながら確認する(触れ方・力の入れ方)。
- ・検査開始時の姿勢・立ち位置や抵抗の方向をその場でフィードバックする。
- ・介入後のできた所とできなかった所の確認。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・デイリーやケースノートなどを合間の時間、出来れば夕方までに記入してもらい、夕方(その日のうち)に本日の振り返りやまとめをFBする。
- ・職場の理解を得て仕事量の調整を行い、フィードバックの時間を確保する。
- ・事前に養成校に学習してほしい内容を伝え、実習中に先の予定を伝え見通しを持って学生が必要な準備が行えるようにする。また学生と実習内容についての目標をたてていく。
- ・デイリーやケースノートをCEが時間内に添削できる範囲だけOTSに修正してもらう。
- ・優先順位をつけ、臨床でしか経験できない内容を優先して経験してもらう。

感想

- ・見学、模倣、実施の過程を指導者は学生それぞれに合った形で一緒に実施していくという事を改めて考える機会となった。指導者自身も自分の指導方法はどうかと確認しながら関わる必要があると感じた。
- ・限られた時間の中で、タイムリーで効率的、なおかつ十分な内容の実習を行うために工夫をしていくことが必要だと感じた。施設ごとで指導者に対しても通常の業務内容の調整など必要な配慮もあると感じた。

報告書：演習7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 4 世話人氏名： 内田 智子

GW 司会者： 下村 太郎 記録者：井手 瑛俊 発表者：神崎 麻理恵

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 指導者相手に模倣（ポイントの確認）
2. 繰り返し説明と確認（リスク管理や客観的な確認）
3. フィードバック

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

- ・一回見せポイントの確認を行う（固定場所、姿勢など）。問題なければ実施する。
- ・指導者から実施し、患者で実施する。力加減など確認する。（段階的に確認）
→アドバイスもしやすい。
- ・鏡などを使用し客観的な確認を行う。声かけ方法も指導者相手に行う。
- ・リスクの事前確認をしてから実施する。
- ・指導者自身の癖など見直し、指導を行う。
- ・学生の緊張を軽減させながら、実施していく（声かけなど）。緊張が患者に伝わらないように。不安を与えないように。
- ・繰り返し説明を行い確認する。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・直前、直後にフィードバックを行う。
- ・学生が悩んでいる際には、ヒントを提示（教科書など）する。
- ・昼休みなどの短時間でもフィードバックを行う。
- ・実習時間内でデイリーノートの記録などを行う。フィードバックも含める。
- ・指導者の担当患者数を調整する。
- ・実習期間の流れやスケジュールの提示。
- ・レポートの課題を小出しにしながら、課題量を調整する。
- ・実習時間内に学生だけの時間も作る（デイリーノートの記録や課題を行う）。

感想

学生の緊張や技術の程度を把握し、指導者と模倣を行うことでポイントの指導を行い、実際の評価やリスク管理を理解できているか確認を行う必要がある。その都度フィードバックを行い、実習時間中のデイリーの作成やフィードバック時間を設ける。可能であれば指導者の担当患者数の調整をおこなったり課題の量を小出しにすることで、指導者、学生の負担も軽減できるのではないかと思う。

報告書：演習7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 5班 世話人氏名：大坪 建

GW 司会者：田中 邑佳 記録者：山本 珠美 発表者：亀山 真奈美

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の理解度の確認
2. リスク管理
3. 行動の明確化

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

- ・実施するにあたっての注意点・目的・一連の流れの確認
- ・模倣の反省点をどう活かすか確認する
- ・学生が不安に思っている点を確認する
- ・リスク管理（立ち位置など）
- ・適切に行えているか確認
- ・学生・患者様が不安にならないよう過度に指導しない（場合によっては後から指導）
- ・実施後に結果を患者様に説明する際の言葉遣いや態度を確認する
- ・反省点・改善点を一緒に練習する

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・時間の使い方をスタッフ間でフォローする（指導者側）
- ・フィードバックの時間の確保（職場の理解、他スタッフの協力）
- ・学生が使える時間を確保する（持ち帰りの課題の軽減）
- ・学生の進み具合によって指導量を調整 スケジュール管理
- ・今日することの明確化・明日することの確認
- ・持ち帰りの課題の確認や提案

感想

- ・実際に業務時間内に指導が終わらないことも多かったので、今回学んだことを次の指導時に取り入れたいと思いました。また、円滑に進むことでお互いにストレスなく実習を行うことが出来ると感じました。
- ・実習指導は、指導者・学生が負担なく臨床に取り組めるように工夫していく必要があると感じました。
- ・業務時間内に指導する時間の確保には職場の理解など課題があると思いました。
- ・実際に行う上での工夫点や次の段階に移る基準などを学べて良かったです。
- ・学生と指導者の両者にとって、指導は時間を要し課題となっていました。皆さんから出た工夫を参考にして、お互いにとってストレスとならないよう実習に取り組んでいきたいです。
- ・学生にも指導者にも負担が少なくなるような工夫を考えることが出来て良かったです。

報告書：演習7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 6 世話人氏名： 桑原 由喜

GW 司会者：岩永 桜子 記録者：吉村 千聖

発表者：田島 光広

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 実施する前の学生への確認
2. 正のフィードバックによる自信づけ
3. 周囲スタッフのサポート（施設内での時間づくり）

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

実施レベル

- ・実施する前に注意点等を伝える。実施後、フィードバックをする。
- ・学生には患者にとって必要な部分だけを行ってもらい、リスク面を説明し実施出来ない部分を伝える。
- ・学生の状態に応じては「模倣レベル」に戻す。
- ・フィードバックをする前に、学生自身に自己評価をしてもらう。（指導者側にも学生の状況が理解出来る。）
- ・良い点をフィードバックして自信をつけさせる。
- ・MMTについてまずセラピストに説明、確認をした上で患者に説明、実施をしてもらう。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・見学後の質疑応答をすぐにしてもらう。
- ・バイザーが記録業務をしている間にデイリーなどを書いてもらう。
- ・職員同士協力し合って、学生の対応時間を増やしてもらう。
- ・実習時間内に提出物のまとめと作成などをしてもらう。
- ・学生の1日の動きを朝に伝えることで各スタッフが学生の動きを把握しやすくする。
- ・周囲のスタッフのサポート
- ・送迎の車の中で、フィードバックを行う。

感想

- ・以前の自分の実習では遅くまで残ったりして大変な思いをした。これからの学生がより良い臨床実習を行えたらよいと思う。
- ・指導者の丁寧な指導で学生は不安が減少し実習中生き生きしてくるのだと思った。
- ・負担を軽減することで学生が本来持っている力を十分に発揮できるようになると思う。